

---

# あの日

明音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの日

### 【コード】

N3298Z

### 【作者名】

明音

### 【あらすじ】

少年の過去には何があるのか想像にお任せします

コンクリートでできた道路は太陽の光を反射して鏡のようになっていた。季節は夏。まさに、体が溶けるような暑さが体を襲う。それでも歩き続けなければならぬ。家までは、まだ何キロもある。ちょうど、橋を渡るときに少年は橋桁を覗いてみた。河原には複数少年と同年くらいの子が水をかけ合っていた。ワイワイとはしゃぐ声が微かだが少年の耳にまで届いてくる。夏の日差しは休むことを知らないのか、どんどん周りの空気を熱していく。少年は暑いという単語を喉元まで出しそうになったが、どうにか堪えた。暑いと言うほどに、体感温度が一度くらい上昇してしまいそうだからだ。少年の足は棒のようになってきた。しかし、歩かなければならない。迎えを呼ぶという手段はあるにはあるが、少年は何となくその選択肢を拒んだ。ここまで、歩いてきたのだ。今更に迎えを呼ぶのが癪に障るのだろう。パカパカと目の前の信号機が点滅を繰り返す。だが、少年は歩みを止めることを好としない。一度立ち止まれば、もう二度と歩き出せる気がしない。全身からは止めどなく汗が流れ落ちる。喉はカラカラに乾ききつているが、水はない。ふと、少年の頭にある言葉がよぎる。熱中症、脱水症、日射病。夏の昼間に水分を取らずに随分と歩き進んでしまった。かれこれ三時間は経っただろう。さつきから、目が霞んで見える。車のクラクションが聞こえるような気がするが、少年は気にせず歩みだす。白昼夢でも見ているのだろうか。先月先に逝ってしまった妹の姿が道路の真中に見える。少女はこっちに振り向いて、笑顔で手を振っている。少年は咄嗟に手を伸ばして少女の手を掴もうとしたが、しかしそれは幻。掴めるはずもない。いきなり道路に飛び出した少年に驚いたのだらう、何台もの車が急ブレーキをかけ渋滞を起こしている。それでも、少年はそれを気につけない。少女の行方を必死に探す。車のクラクションが鳴り響く中、少年は意識を失った。

ここは何処だろうと、少年はぼやけた頭で考えこむ。しかし、何も思い出せない。周囲を見ると、見慣れた白い壁があった。ここは先月まで毎日休むことなく通っていた病院の待合室だった。瞬間的に妹の笑顔が脳裏に過る。目頭が熱くなつたのを感じた。もう、この世には妹はいない。その現実だけが少年のガラスの心を酷く傷つける。一人の看護婦がこちらに近づいてくる。大丈夫？ 気持ち悪くない？ 水が欲しかったら持つてくるよと、話しかけてくる。少年は大丈夫と、不覚にも目に涙をためたまま言ってしまった。看護婦の女性に余計な心配をかけたことに少年は罪悪感を感じ、涙を拭い去って元気良く大丈夫と言い切った。看護婦はそう、でも無理はダメよと少年から立ち去ろうとしたが、振り返りざまにこう言った。ここまで連れてきてくれた人にお礼を言わなきゃダメよ。その言葉で、少年は意識を失う前のことを思い出した。ちょうどその時、トイレから中肉中背の背広を着た如何にも弱々しそうな男性が出てきた。看護婦が言うにはこの男性が少年をここまで連れてきてくれたらしい。少年はその男性に一言二言お礼を言った。男性は良いよ良いよなどと言って手を軽くヒラヒラと振った。彼はこの近くに住んでいるらしく、少年が倒れたときに偶然出くわしたようだった。男性は少年にこれからは気をつけるようにと言って病院から立ち去った。時刻はもう五時を過ぎている。そろそろ帰られなければ、母親が心配するだろう。妹が亡くなってから、まだひと月しか過ぎていないのだ。あまりに帰りが遅いと、心配をかけてしまう。少年は看護婦にお礼を言つて病院を出ようとしたところ、あることを思い出した。少年の診察料は誰が支払ったのだろうか。看護婦に訪ねてみるとどうやら、背広の男性が支払ったようだ。少年はどうかこうにか男性の名前を聞き出し、病院を飛び出した。男性の家はこの近くにらしく、名前を教えてもらったため簡単に見るかるだろうと思つたが、一時間二時間と探しても一向に見つからない。仕方がなく、少年は家路に着いた。家には真新しい仏壇が居間に鎮座していた。中央には妹の遺影だけが飾つてあつた。母は未だに娘の死を受け止め

られないのだろう。毎日毎日、日が暮れるまで仏壇見つめてはかりだった。父親はいつも残業ばかりで碌に家にいない。一戸建ての新築だというのに、まるで取り壊し前の住宅のように静まり返っていた。少年がただいまと言っても、その声はまるでなかったかのように時間が流れていく。この前までは何かしらの反応は示してくれたが、もう返事さえなくなってしまった。彼は冷蔵庫を開けてみるが、これといって食べれるものがなかった。仕様がなく、萎びたキュウリに塩をふって、腹を満たし少年は自分の部屋に戻る。最近、まともな食事を食べた覚えがない。彼は扉を勢い良く閉めると、布団の中に潜り込んだ。そして、羊を数えるのだ。この世界が夢であるようにと願いながら、少年は深い夢の世界に旅立つのであった。

朝。夏休みの朝だ。少年は水道水を飲むと、家を飛び出した。ここにいると、息が詰まりそうだったからだ。何をすることもなし、少年は昨日のお礼をきちんと言おうと思い、背広の男性の家を探した。昨日探索した範囲にはなかったようだから、探索範囲を広げた。何時間と探すが、全然見つかる気配がない。度々、公園の水道水で喉を潤す。昨日の轍を踏まないたためだ。昨日は妹のことが頭から離れず、あんなことになってしまったが、これからは気をつけることにする。夕暮れになり、家に帰る。母は仏壇の前に未だにいた。当然のように、少年が呼びかけても返事はない。彼は棚のカップ麺を食べると、すぐに寝た。少年は背広の男性の家を探すがいつの間にか日課になっていた。朝、起きると直ぐ様家を出て家を探しに行く。しかし、夏休みの間毎日のように探しているのだが、全くもって見つからない。そして、夏休み最終日。少年は家に帰ると、母にただいまと言った。母の返事はいつもどおりでない。漸くのこと、少年は母親の体を揺すって呼びかけてみた。しかし、彼はこの行動に出るのがあまりにも遅すぎた。そこには、母と呼べるものはいなかった。ただ、母の服を着た死体だけがそこにはあった。少年は不思議と恐怖や、虚無感を感じることはなかった。彼はこうなることを予期していたのだろうか。それでも、彼は背広の男性の家を探し

に出かけた。すると、少年は道端にあの男性の姿を見た。彼は男性に縋りつくように抱きつき、泣き喚いた。母親のこと、妹のことを泣きながら話すと、背広の男性はこう呟いた。全て君が悪い。その瞬間、少年の意識は途切れた。

目覚めた時、あの病院の白い壁が目飛び込んできた。看護婦が大丈夫？ 気持ち悪くない？ 水が欲しかったら持つてくるよと、話しかけてくる。違和感を感じた少年は彼女に今日の日付を教えるもらうと、驚愕した。電光石火で自分の家に走り帰る。乱暴に家の玄関を開け、母に抱きついた。しかし、すでに母は妹の元へと旅立った後だった。庭に目をやると、そこには妹の幻がいた。お前が悪い。そう妹は呟いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3298z/>

---

あの日

2011年12月11日13時49分発行